

科学・こころ・宗教

新たなプロジェクトについて

P・L・スワンソン
Paul L. SWANSON

序文

南山宗教文化研究所は長年にわたって宗教間と異文化間の対話を促進する活動を多数行ってきた。しかしながら、最近まで「宗教と科学」の分野の活動については経験がなかった。私たちは、科学とスピリチュアリティ／宗教に関する先進的な研究を中央ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ロシアとその近隣の数々の新しい独立国家、そして南アジア、東アジアの諸地域で支援しているスケールの大きいプロジェクト「Global Perspectives on Science and Spirituality (科学とスピリチュアリティに関する国際的観点)」(以下 GPSS)¹ についての情報を得て、この「宗教と科学」間対話の重要で活発なプロジェクトに参加する機会に恵まれた。2004年7月23日、私たちは GPSS プロジェクトの中心的な研究者であり、プログラム・ディレクターの Pranab Das 教授との懇談を行った。その結果、研究所は GPSS に研究助成金を申請することを決定した。

2004年の秋には GPSS プロジェクトへの準備として3回の懇話会を開催した。

1. 9月17日 山本祐靖氏(東京大学名誉教授)、「科学と宗教に対立はない——キリスト教の立場から」
2. 11月11日 芦名定道氏(京都大学大学院文学研究科助教授)、「科学と宗教の対話——その現状と課題」
3. 12月14日 Frank E. Budenholzer 氏(台湾の輔仁大学教授、科学與宗教研究中心所長)、「中国における科学と宗教の対話——その現状と課題」

2005年の年明け、GPSSの研究助成への申請が受理され、2月に助成金受給の確認書が届いた。このプロジェクトを通して、私たちは次のような目的を達成するつもりである。

2005年から2006年の初めにかけて、「科学・

心・宗教——いま科学と宗教は出会えるか?』というテーマで選り優りの研究者たちによる懇話会シリーズを開催し、最後にシンポジウムを行う予定である。私たちが最終的に目指しているのは、ハード・サイエンスとそれに関連するテクノロジーの領域(物理学、化学、生物学、天文学、ロボテックス、脳科学、神経学、ナノテクノロジー、医学、など)の科学者と科学論者たちを集め、近代科学の進展によってもたらされた争点を議論し、現代日本のスピリチュアリティの役割について再考することである。プロジェクト最終年には彼らの提案を深め、より詳細な議論を行うため、関係者が集まり、3日間のシンポジウムを開催する予定である。なお、これらの会議の成果を関係者が共有するため、ウェブサイト(www.nanzan-u.ac.jp/SHUBUNKEN/jp/Purojekuto/GPSS/GPSS.htm)を立ち上げた。

以下の論文は GPSS への申請のために書かれたものの一部である。ここで私が指摘している点は、「科学と宗教」の対話は日本では限られていること、多くの人たちがスピリチュアリティについて議論することを避けていること、そして「科学と宗教」間の「対話」が敵意まではいかないものの、しばしば疑いの目で見られていることである。しかしながら、このトピックに興味を持っている日本の科学者や研究者たちは決して少なくないことがわかった。これまでのところ、彼らの仕事は孤立していて、それぞれの情報交換もほとんどないのである。科学者と研究者たちのネットワークの発展と彼らの間でのコミュニケーションは、

日本における広い意味での「科学と宗教」の対話の確立にとってきわめて重要である。そしてまた、「科学」と「宗教」はどちらも多種多様で多面的なので、私たちはふたつの領域の全側面をカバーすることは不可能であろう。本プロジェクトが宗教的あるいは科学的な視点による広範で拡散した不協和音で終わることを避けるため、どの争点に焦点を当てるのかを明確にする必要があるだろう。

私たちが提案した懇話会シリーズとシンポジウムは、日本の文脈での「科学と宗教」間の議論を促進し、「正当化」するための準備を意図しており、具体的な争点、人、プロジェクトを明確にする機会にもなり、長期間にわたって特別な注目を受けるに値するであろう。その目的は、広くいえば以下の3点である。

- 科学と宗教の対話に携わろうとする科学者と研究者たちのネットワークを確立すること
- 日本における正当な意義深い試みとして、科学と宗教の対話を促進すること
- 科学と宗教の対話が日本においても重要な認識や問題であると確認し、日本での討議がこの問題に関する世界での議論に貢献できることを明らかにすること

以下の論文は GPSS への申請用に書かれたものの一部で、このプロジェクトに関する私たちの見解と目的を表明している。ここに再掲載して、私たちのねらいの準備報告として提示し、さらなる議論を促すことを願う。

科学—こころ—宗教 / Science — Spirit — Religion

日本のコンテキストにおける科学観と霊性観

要約：本論文では、日本における科学と宗教の対話の可能性について探究することを試みる。科学と宗教の共通点を結びつける方法として、「宗教 (religion)」や「霊性 (spirituality)」のような概念に伴う用語上の問題を論じ、心 (英語では spirit) という日本的な観念や世俗的な現実に焦点を当てる日本人の傾向を取り上げる。また、これらの考察は Global Perspectives on Science and Spirituality (GPSS) プログラムの支援プロジェクトを通じて、日本において科学と宗教の健全で積極的な対話を促進することを目指している南山宗教文化研究所の提言の理論的基礎を提示するものである。

この論文の題名を見て、「科学と宗教」という言葉で十分ではないのかと尋ねる方もいるであろう。なぜ、「spirit」(日本語の心の英訳)という第三の要素が付け加えられているのかと。この疑問に対する一つの答えとしては、(対立しようとして、矛盾しようとして、相互に関係があらうと) 何らかの形で二つの要素の間に関連が想定される場合には、必ずこの両者の関係性を明確化するために、第三の要素を取り入れる必要があるということである。二つの要素を結びつけているもの、あるいは隔っているものとは何だろうか。

日本での科学と宗教の対立において問題になっているのは、「宗教」概念が限定的で問題が多く、科学との対話のための反論相手や「パートナー」としての役割を担うには偏りすぎていて議論を招くという点である。そもそも「religion」(宗教)という言葉は、約130年前に他の言葉とともに西洋から日本に紹介されたものであり、日本のコンテキストでは常にしっ

くりこないまま現在に至っている²。ほとんどの日本人にとって、「宗教」とは(「spirituality(霊性)」に対比すれば)組織的な宗教団体に制度上、所属することを意味する。日本人の90%に達する大多数が自らを「仏教の信者(仏教徒)」と見なす一方、ほぼ同じ数の人々が重複して自分たちを「神道の信者(氏子)」だと認め、さらに同時に日本人の半数以上が自らを無神論者か不可知論者と主張していることは複数の調査で一貫して示されている実態である。このことは、日本社会を分析する上で「宗教」というカテゴリーを使用することの決定的な難しさを指し示している³。しかしながら、「宗教」という言葉には精神の問題、伝統的価値、倫理的問題、感性、情緒的な癒し、有意義な儀式等の肯定的な含意もある。ただし、現代日本のコンテキストでは「spirituality(霊性)」という言葉のほうが有用ではないかという意見もある。とは言え、「spirituality(霊性)」は浅薄で一時的に流行した、いわゆるニューエイジ運動のつかの間の光景として捉えられることが多い。また、宗教団体とは無関係だが、深遠な思想や伝統的価値の奥深さを持たないといった否定的なニュアンスも含む。だが、制度上の関わりなしに「spiritual(霊的)な」希求を表現する方法として肯定的にも考えられている。これらの理由から、「科学と宗教」という単純な常套句では誤解を招いてしまうおそれがある上、数多くの西洋的な言葉の持つ含意と同じ含意を伝えることもできないのである。

しかし、最近の西洋に見られる「科学と宗教」の対話の可能性がないわけではなく、言葉遣いを全く取り替える必要があるというわけでもない。むしろ、必要なのは「and(および)」

の意味を明確にすることである。つまり、対話においてこの二つを結びつける「bridge (橋)」となる概念、いわば両者に精通していながら、どちらか一方にのみ帰属するわけではない概念が必要となる。日本のコンテキストでは、心がこの役割を果たす橋渡しの概念となり、科学と宗教の対話が制度上の提携の問題ではなく、spirit (心) の問題であるという理念を強調しようと私は考える。

この論文のタイトルで、「spirit」と翻訳した「こころ・心」とはどのようなものであろうか。心とは「spirit (精神)」の動きや「will (意志)」の衝動だけでなく、「mind (知性)」の合理的な働きや「heart (心情)」の情緒的な感情も含む多面的な価値であり、幅広い意味を持つ日本語の概念である。心はこれらのすべてを含み、「thoughts (思考)」と「feelings (感情)」が同じものだと固執するわけではなく、これらが一体で不可分であると想定されている。つまり、統一のなかの多様性、多様性の統一を意味するのである。したがって、日本語でspirit (心) の問題は合理的な思考と情緒的な感情の両方を兼ね備え、何の矛盾も伴わないものであると見なすことができる。例えば、日本語でコミュニケーションを行う際には、ロボットやコンピュータが心を持っているという考え方をたやすく受け入れることができるが、英語でロボットが「heart」や「mind」を持っているなどと言う場合は、かなり困難で厄介なことになる。例を挙げれば、ソニーのロボット犬 AIBO やホンダのヒト型ロボット ASIMO に心があるという考え方は受け入れやすい。というのも、彼らは外部の刺激に反応して、自らの「volition (意思)」で動いたり話したりするし、人間に愛情の念を起こさせるような行動をするからである。だが、英語でアイボやアシモ自体に「mind」や「heart」があると言うだろうか。おそらく心という概念には個々の対象だけではなく、そ

の対象への反応や対象と環境との関係も含まれるために、日本語でそう表現することに意味があるのではないだろうか。ある物に心があると言う場合には、その対象自体が何であるのかというのと同じように、対象に対する自らの反応についても語っているのである⁴。

天台仏教の開祖、天台大師・智顛は聖トマス・アクィナスが西洋で果たした役割と同じように、東アジアの仏教に多大な影響を与えた人物であるが、彼は「世俗の世界」(日々の日常的な経験)と「真実の世界」(物事の真実のあり方)が、「不一不二(一にみならず、二にみならず)」、「不異不同(まったく異なったものでなく、まったく同じものでもない)」、「不二不別(二にみならず、別にみならず)」、「不合不散(まったく融合しているものでもなく、まったく散乱しているものでもない)」である様子を語った⁵。この不一不二の観念は、物事は他の事物や全体と一体性を維持しながら個別性を保っているという考え方であり、日本人の世界観の重要な側面となっている。むしろ、「不二」という概念はアジアや仏教に特有なものではない。例えば、ジェイコブ・ニードルマンは、科学と靈性を「有機的な統一」、「分離しているが相互に支えあう実体間の相補的な関係」と述べている⁶。とは言え、不二という考え方が日本のコンテキストにとって重要な観点であることに変わりない。不二とは個々の独立した本質に焦点を当てると言うよりも、むしろ様々な現象間の関係を理解しようとする傾向のことである。おそらく、科学と宗教、「heart (心情)」と「mind (知性)」についても同じことが言えるのではないだろうか。さらに、この不二、つまり相補的な関係にもつづいた日本人のものの見方が、科学と宗教の対話に新たな光を当てることができるのではないだろうか。

日本のコンテキストにおける科学と宗教

西洋で行われてきた意味での科学と宗教の対話は、日本ではまだ非常に少ない。先に論じたような論点によって生じる様々な予想に加えて、科学者だけでなく、一般の日本人も宗教や霊性について議論することに反感を持っている場合が多く、この話題に関する「対話」は不信感や時には敵意さえも持たれることが多いことも付け加えておかなければならない⁷。日本では科学と宗教の組み合わせとすると、超能力に「科学的」根拠を見出そうとするテレビ番組（他方、テレビに出演してこのような超能力の正体を暴こうとする典型的な科学者）のイメージ、あるいは自らの宗教的な生き方や世界観、もしくはそのいずれかが何よりも「科学的」であり、現代世界に最も適したものであるという一部の宗教指導者の主張を想起させる。日本では、このテーマについて西洋の洗練された対話に匹敵するような議論はまだほとんどなされていないのが現状である⁸。もし、日本でこのような議論がなされる場合、どのような形をとるだろうか。また、どのような論点が中心になり、議論の方向は西洋の場合と異なる方向に向かい、新たな洞察をもたらしてくれるだろうか。

単純化しすぎる危険をあえて冒し、西洋における科学と宗教の対話について大まかに言えば、その議論の多くは創造主である神という観念に関係しているか、何らかの形で結びついていることがわかる。それが創造主である神への信仰が現代科学と矛盾しないことを明らかにしようとする議論であろうと、創造主としての神が受け入れがたいという理由で科学とは相容れないものとして、宗教の正体を暴こうとする議論であろうと同じである。そうした議論と対話の多くが、キリスト教（または反キリスト教）のコンテキストで発展してきた状況を考えると、これはやむを得ないことかもし

れない。しかしながら、日本のコンテキストでは創造主である神の肯定も否定も必要ない。むしろ、これらの言い方でその争点を押しつければ、真の意味での日本固有の議論を削減してしまうかもしれない⁹。創造主としての神という概念が西洋では中心的な争点であるのに対して、日本ではそうではないとすれば、その中心的な争点はどのようなものになるのだろうか。また、どのようなものであるべきなのだろうか。これは、長期にわたる議論や対話を実際に行わなければ答えが出せない問題であるが、仏教と科学の間で行われた最近の対話で明らかにされたように、「知性」(mind)と「意識」(consciousness)に関する問題が、その重要な役割を担うのではないかという指摘がある¹⁰。日本のコンテキストでは、西洋に見られる宇宙論的な起源、存在論的な原理、創造主である神の（あるいは創造主のものではない）働きという抽象的な争点よりも、日常的な実践や家族のしきたり、世俗的な現象の関わり合い、（科学の進歩によって生じる倫理的問題に関する）伝統的価値の問題がより大きな重点を占めるであろう。対話の焦点が「知性」(mind)や「意識」(consciousness)に当てられようと、日常の世俗的な経験に当てられようと、重要な概念は心なのである。

結びにかえて

宗教間対話に参加して人が学ぶことは、例えば、対話するのは「仏教」や「キリスト教」そのものではなく、むしろ人間——何らかの宗教的伝統、あるいは多くの宗教的伝統を組み合わせたものから知識を得て、影響を受けた各人——が対話するということである。これは科学と宗教の場合も同様であると思われる。「科学」や「宗教」そのものが対話するのではなく、科学と宗教の両方から知識を得て、影響を受けた人間が「分離しているが相互に支

えあう実体間の相補的な関係」¹¹とジェイコブ・ニードルマンが呼ぶ状況のなかで、お互いに何らかの洞察を得ようと努力していくことが重要である。日本の多種多様に富んだ宗教的伝統によって、状況はさらに複雑化しているが、創造的な対話を促進することもできるであろう。

最後に、科学と宗教に関する一般的な認識や固定観念について言及すれば、両者とも確実性（経験する現象についての確たる事実や確かさを決定する方法としての科学と、経験上は検証できないものの、教義への信仰にもとづいた確かさを持つ方法としての宗教）を扱っているが、科学と宗教相互の「心（spirit）」は常に何が真実であるのかを追い求めながら、世界についての疑いや驚きと共生できるものである¹²。これは日本であろうと西洋であろうと、いかなるコンテキストにおいても変わらないものであると私は考える。

引用文献

- 『大正新脩大蔵經』100巻、高楠順次郎他編、大正新脩大蔵經刊行、1924-1935年。
- 芦名定道他編『科学時代を生きる宗教——過去と現在、そして未来へ』北樹出版2004年。
- FITZGERALD, Timothy, *The Ideology of Religious Studies*, Oxford and New York: Oxford University Press, 2000.
- JASPERS, Karl, *Way to Wisdom*, New Haven and London: Yale University Press, 1954.
- KISALA, Robert, "Asian Values Studies," *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion and Culture* 23 (Spring 1999): 59-73.
- NEEDLEMAN, Jacob, *A Sense of the Cosmos: The Encounter of Modern Science and Ancient Truth*, New York and London: Arkana, 1988.
- [菅靖彦訳『宇宙感覚——科学と叡智の出会い』平河出版社、1995年]
- 島蘭進、鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリかん社、

2004年。

註

1. GPSS は John Templeton Foundation によって基金が供出され、フランスの Université Interdisciplinaire de Paris とアメリカの Elon University によって合同で運営されている。www.uip.edu/GPSS/ のサイトを参照のこと。

2. この問題は、現在日本の宗教学者の間で熱心に議論されている。この問題をめぐる争点を最もわかりやすく要約している文献として、島蘭進、鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ペリかん社、2004年を参照のこと。

3. 日本における宗教と価値に関する調査については、KISALA 1999 を参照のこと。日本のコンテキストにおける「宗教」という言葉を完全に拒絶して論じた極端な例として、FITZGERALD 2000, pp. 159 以下を参照されたい。

4. 注意：ただし、私は心のような概念が「日本人固有」のものであって、日本人以外には理解できないという民族中心的な主張をしているのではない。いかなる言語においても、言葉と概念には独自のニュアンスや応用があるため、別の言語に完全な同義語は存在しない。にもかかわらず、「religion（宗教）」のような西洋出自の言葉が日本でも意味を持って使用できるように、心のような言葉も他言語のコンテキストで説明や理解ができるのである。

5. 例えば、東アジア仏教の実践と理論に多大な影響を与えた仏教思想書『摩訶止観』（『大正新脩大蔵經』46巻34下）を参照のこと。

6. NEEDLEMAN 1988 参照。

7. GPSS プロジェクトに対するわれわれの提案の日本語の副題は「いま科学と宗教は出会えるか」であるが、こうした問いかけによって、この関心を反映させた。

8. 一つの例外として、（インフォーマルな集まりではあるが）「宗教と科学」研究会がある。この研究会は十年以上にわたり京都で会合を開いており、その成果は、芦名定道他編『科学時代を生きる宗教——過去と現在、そして未来へ』北樹出版、2004年として公刊された。研究会のHP: www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/science/ も参照されたい。

9. それでもやはり、日本でさえ科学と宗教の対話の多くは、上記の京都の研究会など、キリスト教

徒やキリスト教のコンテキストによって行われてきたことを認めなければならない。研究会のリーダー 芦名定道は、京都大学大学院文学研究科のキリスト教の助教授である。このことから、科学と宗教の対話が本質的にも必然的にもキリスト教（あるいは少なくとも一神教）の努力であるのか、あるいは科学と宗教の結びつきが歴史的な偶然であるのかという点については疑問が起こる。東アジアにおける科学と宗教の対話の発展が、この疑問に対する答を導いてくれるはずである。

10. 例えば、Mind & Life Institute の仕事、ダラ

イラマやその他の高名な仏教者と科学者たちとの会合を参照のこと (www.mindandlife.org) を参照)。

11. NEEDLEMAN の 1988 前掲書を参照のこと。

12. 内観のよりどころとしての驚きと懐疑の重要性については、JASPERS 1954、特に pp.17-27 を参照されたい。

ポール・L・スワンソン
本研究所第一種研究所員